

記憶力低下 診断は「うつ」

茨城県取手市の自営業Aさん(70)は2015年春、家の近くで車を運転していた、ふいに、帰り道が分からなくなった。頭や胸が、ぞわぞわするような不快感に襲われた。

異変は続く。同じ頃、次女(47)から栃木県日光市に出かけた時の写真を見せられた。孫たちと一緒に写る自分。1か月ほど前のことだというのが、記憶がない。写真の中でほほえむ自分が他人のように思えた。

運転中の事故を心配する次女らの強い勧めで、車を手放した。

その後も、多い時は1日4、5回、不快感とともに記憶がパツとなくなった。大事な納期などはメモを取り、ミスなく仕事をこなすだけで精いっぱいだった。

「見たこともないような陰しい顔をしている」。いつも温和な表情を浮かべて

いたのに、すっかり面変わりしたAさんを見た次女らは認知症を疑った。

順天堂大病院のメンタルクリニックを受診した。MRI(磁気共鳴画像)や認知機能の検査をしたが、特に問題はなかった。身体の問題も見つからなかった。担当医の新井平伊さん(現・アルツクリニック東

京院長)が、Aさんとじっくり話をすると、離婚問題で悩んでいることが分かった。心機一転しようと、東京都内から引越したばかりだった。

まじめすぎる性格に離婚のストレスが重なり、自律神経が乱れて軽うつ状態になっていた。精神的な余裕がなくなり、物忘れをしたり、上の空の状態になったりする

——。新井さんは「うつ病の一步一步前の適応障害」と説明する。Aさんは「自覚症状がなかったから、うつと言われたのは意外だった」と振り返る。

高齢者のうつ病や適応障害は、気分の落ち込みといった典型的な症状を示さないことが多い。不眠や身体の不調、焦燥感など様々ある。判断力や集中力、記憶力の低下も見られ、認知症と間違えられることも少なくない。

一方、認知症がある人の約2割がうつ状態になっているという国内外の調査もある。新井さんは「精神疾患は検査結果だけでは診断できない。受診前の様子やその後の経過も含め、長期的に見ていくことが欠かせない」と話す。

処方された抗うつ薬を飲み始めると、Aさんは不快感や物忘れがほとんどなくなった。3年前に離婚が成立。気力が戻ってくるのを感じ、車を購入して再びハンドルを握っている。仕事も以前より忙しい。

愛車のハンドルを握るAさん。一時は運転免許の返納も検討したという
(茨城県取手市で)

今も月に1度、クリニックで新井さんに近況などを聞いてもらう。「心の健康を確認する、お守りみたいな存在です」

